

氏名(本籍)	ばく 朴	いん 仁	ちゃん 贊	(韓 国)
学位の種類	博 士 (感性科学)			
学位記番号	博 甲 第 5789 号			
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	<b>The Cultural Characteristics of Kansei for Image Perceptions: focused on cognitive styles and sensations</b> (イメージ知覚に関する感性の文化的特徴：認知スタイルと感覚に焦点をおいた)			
主査	筑波大学准教授	博士(工学)	花里俊廣	
副査	筑波大学准教授	博士(デザイン学)	五十嵐浩也	
副査	筑波大学准教授	医学博士	山本三幸	
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	齋藤泰嘉	

## 論文の内容の要旨

### (目的)

物を使う人や選ぶ人が行う、感性評価をもとにした判断のメカニズムを知ることがデザイナーにとって重要な知識となり得る。Chou, Nisbett らの先行研究によれば人の判断の方法に「属性を基準にした判断(AT)」と「関係を基準にした判断(RT)」があり、それぞれアメリカ人と中国人に多く見られる判断基準であるとされてきた。この研究では、こうした人が物を判断するあるいは創造する際に用いる考え方 = Cognitive Style の考え方をを用いて、物を評価する際、あるいは想像する際に使われる考え方に文化的背景に関連する違いが見いだせるかどうか確認しようとした。

### (対象と方法)

研究対象は、予備実験では日本、韓国、英国、オランダ、本実験では、日本、韓国、英国、フランス、中国と、複数の国籍の被験者を用いた。評価方法は、先行研究でも用いられていたイメージの類似性判断課題(Categorizing Images 課題)に加えて、キーワードに対する想像課題(Image Association 課題)、と印象列記課題(Image Sensing 課題)を用いた。それぞれの実験において被験者の AT 傾向、RT 傾向を判断し、その国籍、性別による違いを考察した。

### (結果)

予備実験において、Categorizing Images 課題のみを実施したところ、日本人、オランダ人、英国人に対して韓国人被験者において顕著に RT 傾向が強いという結果が得られた。これは先行研究で示された「中国人とアメリカ人の判断傾向の違い」を「東洋人对西欧人」と解釈したときには、本研究はこれらと矛盾する結果を得たことになる。しかし、この段階で韓国の被験者のみが芸術傾向が強かったため、学生の論理的思考力の違いが結果に反映されている可能性があった。そこで被験者の論理的思考傾向による違いが生じるかどうかを確認するために、日韓の大学において、理数系の能力が要求される学科とそうでない学科の学生を対象に再度 Categorizing Images 課題を実施し、検討した結果、国籍および性別の中では、男性の場合にのみ数

学の好みのある／無しによって AT 傾向が高くなる結果が得られたが、女性の場合は両国ともに傾向の有意差は見られなかった。一部の被験者属性において傾向の違いがみられたため、続く本実験では各国の被験者構成の中でこうした偏りが起こらないように被験者属性を慎重に設定することとして、本実験を行った。

本実験では、英国、フランス、中国、日本、韓国の5ヵ国において、複数の大学の被験者を得て Categorizing Images, Image Association, Image Sensing 課題を実施した。その結果、英国人の AT 傾向が高く次に中国人となり、日本人とフランス人が同程度、韓国人が最も AT 傾向が低い結果となった。ところが、Image Association 課題の結果は、中国人と英国人の AT 傾向に対して、日本人、フランス人、韓国人の AT 傾向が高くなるという結果を得た。Image Sensing 課題においては、フランス人と韓国人が有意に感覚的に反応する結果となった。Categorizing Image の結果と Image Association 課題の結果が反転していること、東洋、西洋の地域的区分による違いよりも国籍による違いが強く見られることなど、先行研究と異なった結果が得られた。

#### (考察)

Categorizing Images 課題と Image Association 課題は両方とも明瞭に AT 傾向を測るものであったにもかかわらず、特に日本人、フランス人、韓国人の傾向が逆転する結果が得られたことから、目の前にあるものを評価する場合と類似したものを想起する過程で AT / RT といった思考方法の用いられ方に文化による傾向が存在する可能性が考えられる。このことを示した点が本研究の成果であると考えられる。さらに、Image Sensing 課題において高い感受性を示したのがフランス人と韓国人であったことから、感受性に関する能力について、東洋 / 西洋といった大きなカテゴリーで評価することに無理があることを示した。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

長い間支持されてきた「西洋人は属性基準に判断し、東洋人は関係基準の判断をする」という捉え方が、必ずしも東洋／西洋といった枠組みに依存するものではないと示した点では価値ある結果を示していると言える。しかしながら、被験者の属性は東洋西洋、国籍のみで区別されるのではなく、こうした考え方の違いの被験者属性依存性をはっきりと述べるためには、本研究の結果を含めてさらに詳細な検討が必要であることは言うまでもない。これまでの常識的な考え方に対して一石を投じた価値は重要であるものの、新たな考え方が異なる理由を示すためにさらに研究を進めてもらいたい。

論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（感性科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。